

(6) 三歳から一目一字ずつ

“石の上にも三年”の根気

いかがです。(5)で申し上げたことを実行して下さった方は、一日わずか3分間程度の学習で、お子さんにも漢字が覚えられる、ということがよくわかりいただけたと思います。それで、一か月間に30字を3年間続けていけば、だれでも一千字の漢字が覚えられるわけも、おわかりいただけたと思います。

(4)に述べましたように、中学生でも、一千字を理解していない子どもの方が、理解している子どもよりも多い、というのが現実ですから、三歳の時からこの学習を始めますと、小学校に入学するまでの間に、平均的な中学生以上に書物が読める子どもになれるわけです。

「それは理屈であろう。いかに何でもそんなにうまく行くはずがない」、そうお考えではありませんか。確かにそうお考えになるのも無理はありません。小学校へもまだ入らないというのに中学生以上に書物が読めるなどとは、自分の目でこれを見ない限り、とても信じられるものではありません。だから、今は私も、「半信半疑で結構ですから、とにかく三年間実行してみてください」と言うだけに留めておきます。

昔から、「石の上にも三年」という言葉があります。何事でも、三年間続けてやるだけの意欲、つまり“根性”のない人間は物にならない、ということでしょう。漢字学習でもそうです。「それはぜひ必要なことだ」と考えて、それが三年間続けてやれないようでは、いかに子どもに能力

の高いことを望んでも、それは無理というものです。

「蛙の子は蛙」と言われていて、性格でも能力でも子は親に似るものです。事実、何年か前に行なわれた都立教育研究所の調査によりますと、「テレビをよく見る親の子は、やはりよくテレビを見、成績の伸びも知能の割に悪い。それに反して知能の高低によらず、成績の伸びの良い子は、テレビを見る時間の量が少なく、その子の親もテレビを見る時間が少ない」ということです。この調査からみても、知能にせよ学習成績にせよ、その良い悪いは全く子どもの責任ではなくて明らかに親の責任だ、と言った方が正しいようです。

だから、わが子を能力の高い子にしたいと心から望むならば、親自身がそれに値する努力をしなければなりません。つまり、少なくとも3年間は、一日一字の漢字学習を怠るような親であってはなりません。もしも、それだけの努力が出来ないというのであれば「蛙の子は蛙」とあきらめて、わが子がどんなに悪い成績であっても、親としての至らなさを責めて、決して子供を責めてはなりません。

さて、ここでも下に一か月分の学習漢字を掲げてみます。(5)で紹介した漢字が終了したらどうぞ試してみてください。昔話に出て来る動物などは、(3)の“鳩と蟻”の要領でなさると一層有効です。

肉、卵、牛乳、お茶、お菓子、林檎、密柑、葡萄、箸、皿、茶碗、兎、亀、牛、羊、豚、鶏、鳩、鴉、雀、蟹、蜂、蟻、蛙、蝉、蝶、お爺さん、お婆さん、お母さん、お父さん。